

# 「私たちの十五歳の頃」

東日本大震災から5年目に入ります。私たちの住む会津地域には双葉郡から多くの人が避難してきました。私たちは、生まれた土地に育ち住んでいます。いま避難している人には、「ふるさと」はまだまだ遠くにあります。

今回、大熊町地域学習応援協議会の事業として、大熊のみなさんの十五歳のころを聞き書きしました。それは、大熊の子どもたちに地域の事、そこに住んできた「思い」を理解して欲しかったからです。

この事業は、会津大学短期大学部の学生と、特定非営利活動法人寺子屋方丈舎のスタッフが聞き書きを行いました。大熊の子どもたち、そして、地域のみなさんの何らかの記録になれば幸いです。

主催…大熊町地域学習応援協議会

2014年(平成26年度)文部科学省

学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業(委託事業)



語り手  
鈴内章一さん  
(67歳・下野上2区)

## 悩みは抱え込まないのが大切

今回お話を伺ったのは、大熊町出身の鈴内章一さん(67)。高校卒業後は陸上自衛隊の航空科に所属し、37〜8年にわたり、ヘリコプターのパイロットとして災害派遣などの場で活躍されてきたそう。

「辛かったことですか？徹夜が多いと寝る時間が短くてきつくなったことはありましたね。あとは、いろんな上司がいましたからね。厳し

い上司もいて、階級社会だから、上から言われたことは逆らえなかったですね。」

「そうなんですね。鈴内さんはどう困難を乗り越えてきたんですか？」

「上司は厳しかったですけど、転勤があるから上司もそのつど変わるんですよ。だから、同じストレスをずっと抱えてるってことはなかったですね。悩みは一人で抱え込んだらだめだと思います。相談できる人に相談するのが大事だと思えますね。あとは、嫌だったことは早く忘れるのが一番だと思います。」

「一人で抱え込まないっていうのは大事なことですよね。鈴内さんはご自身が中学生のころのことを覚えていたりしますか？」

「中学生…あんまり覚えてないけど、高校受験の時期は、いわきに行くか双葉に行くかという部分もあると思いますね。忘れてほしくないっていう部分もあるけど。とらわれて生きるっていうのもおかしい気がするんですよ。記憶を風化させないことより、防災のことを考える必要があるんじゃないですかね。最終的には、ものがなくなったり時とかいろんなことに対応できる野生的というか、そういうのが必要じゃないですかね。震災があつてから、みんな気持ちは変わってると思うんですよ。今の若いもんは…っていう考えだけじゃなく、若い者の気持ちを理解してあげることが大事なんじゃないですかね。」

悩んでましたね。当時私が通っていた中学校にはプールも体育館もなかったんですよ。土のグラウンドしかなかったからスポーツは野球が一番でしたね。私は軟式テニスをやりました。でも、先生が経験者じゃなかったから、みんな遊びみたいな感じで。高校に入って始めてバスケとか卓球をやりましたね。」

「体育館があることが当時は貴重だったのですね。2011年の震災からもうすぐ4年経とうとしてますが…今どんなことを考えますか？」

「大熊に戻れるなら戻りたいですけどね、生活もしやすかったです。大熊の友達とも会津に来てからバラバラだしねえ、たまには会うけど。震災記憶が風化しないようにって言うけれど、ある程度は忘れてしまったほうがいい



聞き手  
若山奈央さん  
(会津大学短期大学部  
社会福祉学科2年)

「震災の記憶を風化させないことよりも、次災害があった時の準備をする方が大切」という鈴内さんの言葉が印象に残った。過去にとらわれず前向きに生きる強さを感じた。